慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	都会と田舎
Sub Title	
Author	気賀, 勘重
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1915
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.9, No.8 (1915. 8) ,p.882(50)- 903(71)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19150801-0050

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

都會と田舍

氣賀勘重

一

都會と田舍の關係は何れの方面より觀るも古來常に好個の對照たり。田園生活と都市生活の得失都會民衆と農村人民の特質長短、農村經濟と都市經濟の相違、都鄙文明の懸隔等觀じ來れは政治、經濟、道德、社會何れの見地よりするも論議研究の好題目たらざるなし。而して此兩者の關係上最近に於て最も世人の注意を惹き、識者經世家の研究題目となれるは十九世紀以降に於ける都市の急激なる膨脹と其膨脹の一國全社會殊に地方農村に及ぼせる各種の影響なる可し。工場勞働者の保護、都市住居供給の方策等都市に於ける社會政策の問題を初として、一國食料品供給の問題農村人口の比較的減少、農業勞働者供給の問題、農村の疲憊救護の問題等最近の重要なる經濟政策上の問題は多く其端を此に發せるの狀あり。而して曾に經濟上のみならず、政治上、社會上、幾多の問題も亦其端を此間に發し、都市膨脹の利害得失は其弊害矯正の方策と共に、今や實に政治家、道德家、社會學者、經濟論客の等しく留意研究する所と爲り其間、是非得失の見解區々に分れて甲論乙駁未だ底止する所を知らず。之に對する國家の施設亦區々として未だ一定する所なきの觀あり。

就中、商工立國を主張せる一派の自由主義者の極端なる論者の如きは都市膨脹の此趨勢を目して商工業繁盛、國富增進の原因たり將た結果たりと爲し、之に伴ふ弊害の如きは其利益の大なるに比して敢て憂ふるに足らずと樂觀せるの狀あり。從つて此趨勢に對する國家的施設に關しても毫も此趨勢を制限するの必要を認むることなく、寧ろ都市移住を容易ならしむるの方策に苦心して爲に生ずる農村の損害殊に農業勞働者に欠乏の如きは殆んど之を顧ることなく、各個人が比較的不利益なる農村生活を捨てゝ割合に利益多き都市生活に移るは個人に取りては其人の地位向上、國家社會に取りては經濟的進歩の徵象なりとして其自然の趨勢に放任せんとするものゝ如し。其狀恰も地方農村の經濟的發達の如き過去に於て

は兎に角將來の國民經濟の發達に取りては殆ど顧るに足らずと爲し商工業の發展都市の發達だに進歩せは國民經濟の發達期して待つ可しと爲すに似たり。

然るに其一方には又等しく極端なる一派の保守的農業國本論者あり。經濟上は勿論政治上、社會上並に道德上に於ても農を以て國家社會の基礎たり、大本たりと爲し都市膨脹農村衰微の此最近の傾向を目して國家社會の頽廢の徵表なりと悲觀しつゝあるを觀る。而して此種悲觀論者の經濟政策、社會政策に關する主張を糺せば、其眼中には農民の利益、農村の利益の外復た他に國家社會の利益あるなく、苟も農民農村の利益に反するの事實あらば、農民に及ぼす其障害其不利益の多少大小如何は殆ど之を問ふことなく、他の職業の階級に及ぼす其影響の如何も亦之を問ふことなく、國家の全力を盡して之が排除に盡さゞる可らずと爲すものゝ如し。即ち此徒の意見に據れば農業の促進農民の幸福の爲には如何に商工業の利益を犧牲にし都市の發達を阻害するも敢て辭する所に非ざるなり。故に農村子弟の都市に移住する者益々多く農業の經營爲に沮害さるゝの狀を觀ては、一方には都市生活の浮華を呪ひ農業の神聖を說き精神的訓戒に依りて子弟を農村に引止めんとすると共に、又一方には只管農村の爲に國家的社會的各種の負擔を輕減し、國家の保護を厚ふして其生活を容易ならしめ、甚だしきに至りては農民の移住を制限して、所謂る都市への移住を阻止するの策を講ずるに至る國民經濟上農を主とし爾餘の產業を從視せる此種農本論者の見地よりすれば、又當然の見解なる可し。

世人或は云はん。苟も經濟社會の實情に多少の智識を有する者は今日復た斯の如く極端なる見解を抱く者なかる可しと。實に上述の如く其所論の骨子を赤裸々に表明し來れば、何人も復た斯る極端の議論を主張し得る者なかる可しと雖も、世論の實際を觀れば、此兩樣の見解は種々なる經濟政策上の問題の發生する每に種々なる形骸の下に斷えず其鋒芒を表しつゝあるなり。近く一昨大正二年度の租稅減廢の問題に就て之を觀るも、其一端は明に此に現はれ、兩論者各其所見を貫徹するに苦心せしに非ずや。即ち當時行政整理の結果國庫に多少減稅の餘地あるを示すや、商工主義の論者政客先づ立ちて營業稅織物稅等商工業者の負擔の急を叫べば農業本位の識者論客は地租の輕減、農村の救濟を唱へたるは即ち是なり。其他各種の關稅殊に穀物關稅の制定に際して其存否及び定率の高低に關する論の常に

斷えざる、治水鐵道等の事業の緩急に關して種々の見解の輩出する復た正に如上の極端なる見解の衝突より生ずるもの多きに居るは實に各國各地方の通態たるなり。

さはれ、經濟社會發達の大局の上より大觀すれば、都市と田舍の區別は經濟的進歩の必要より起れる一種の分業に外ならず。生產上の能率增進の爲に農商工其職を分ち產業經營上の利便の爲に都鄙の區別を生せるものなり。故に各種の產業は分業の常として相互相賴り相俟ちて初めて其共通の目的たる經濟社會全般の欲望を達し得可きものに屬し、決して相互獨立せるものに非ず、都鄙の間復た決して利害矛盾す可きものに非ず。要は各種產業各々其經濟社會に於て適度の發達を爲し互に相補充して其間過不及なく、偏輕偏重なきに在り。故に經濟上孤立せる一國一地方の經濟社會に就て之を觀れば農業從業者の過多に偏するも商工業者の過少に偏するも共に慶す可きの現象に非ず、都鄙の人口常に適當の比例を維持し各業互に過剩なく不足なく、以て當時の資本勞力の許す最高限度の生產に盡し、社會全般の欲望滿足を可及的最大ならしむるこそ、最も望ましき狀態にして、經濟政策の主眼も亦一に此理想を實現するにあらざる可らず。然れば斯る社會に於ては商工立國主義も農本主義も共に偏頗の見たるを免れず又何れも實行せんとするも得可らざる空想たるを免れざる可しと雖も、當今の文明國に於けるが如く、交通商業充分に發達し一國一地方の生產物は廣く其販路を世界各地に求め得可きと共に、當該地方に不足せる財貨は之を他の地方の邦國に仰ぐこと難からざる社會に於ては、單に經濟上より觀れば必ずしも一國一地方內に於て各種產業の適度の均衡を維持するを必要とせず、場合に依りては、一地方一國全部が一部特種の、特に其地方に有利なる產業に從事し、其生產物の販路を廣く他鄉他國に求めて爾餘の必要品は他より供給を仰ぐの却つて利益なること、恰も各國が一種專門の產業に從事して必要品全部を他の供給に仰ぐを利益とすると異なることなきの例少なからず。是れ一國一地方の見地よりして商工立國論又は農本主義の唱へらるゝ所以にして、其議論は何れも一理なきに非ず。其當否は一に其地方其邦國の當時の地位境遇よりして、適宜判定す可き問題に屬し、甲國に實益ありたりとて直に其施設を乙國に是認し得るが如き問題に非ざるなり。要するに商工立國か農業本位かの問

題は各其地方の內外の事情に照して、之を決す可き比較的利益の問題に外ならざるが故に、吾人は我國に於ける現今の此種議論に對しても亦一般的に其是非得失を斷言するを避く可しと雖も、併し此問題に關して說を立つる世間の識者に對して特に吾人の注意を希望する一事は田舍と都會の間に存する密接なる關係是なり。此關係は固と兩者の區別が分業に基因するの一事よりして既に明なる所なりと雖も、地方的分業さては國際的分業の漸く發達し來れる現社會に於ては一國一社會內に於ける其關係は復た往時の如く直接ならず從つて動もすれば說を立つる人士の漫然看過する所と爲るの虞なきに非ず。彼の徒に都市の膨脹を呪ふ極端なる農本論者も將た又商工萬能を唱ふる急進的商工主義者も其極端なる議論は多くは此關係を等閑視せるの結果に外ならざるなり。

二

都市は田舍の生產物の需要者にして田舍は都市商工業者の顧客なりと云ふ交易上の相互依賴の關係は交易の發達せる今日一國一地方のみの上に於て必須の關係と云ふを得ざること前述の如しと雖も、併し田舍が都市人口補充の源泉として都市の發達に一大貢獻を爲しつゝあるの事實は今尙ほ昔時に異ならざるの關係なり。此點に於て都市が國內全般殊に附近の地方に負ふ所甚だ多かりしは、古今東西を通じて今尙ほ渝らざる一大事實なり。

只此點に關して我國に精確なる人口統計の以て徵す可きものなきを遺憾とすれども、暫く歐洲諸國の統計に就て之を觀察すれば最近三十餘年以前に至る迄は歐洲の都市は概ね自然的人口減少の實を示せり。換言すれば都市人口の死亡率は多くは其出生率を超過したり。故に他より補充的に流入し來る人口の絕無なりしならんには、都市は何れも數代數十代の間に自ら廢滅す可かりしなり。然るに大多數の都市の啻に廢滅せざるのみならず多くは益膨脹せし所以のものは一に田舍より人口の補充ありしが故なり。換言すれば都會より田舍に歸住する者よりも田舍より都市に移住し來る人口の著しく多かりしが故なり。最近に及び獨逸の伯林を初として倫敦巴里其他多數の都市に於ては此狀勢一變して人口の出生率は多少其死亡率に超過し此等の都市も亦此に所謂る人口の自然的增加を見るに至り、

方今文明國の都市は僅數の小都會を除くの外概ね田舍よりの移住を待たずして多少其人口の增加を致し得るの域に達せりと雖も、併し最近に於ける都市人口の增加は往時よりも遙に急速にして此自然的增加率の示せる程度を超ゆること遙に遠く、而して其增加率の迅速なる實に近世都市の特徵を爲し、前述の如く一部識者の謳歌する所と爲ると共に、一部論者の悲觀する所と爲り、學者經世家の細心研究する一大問題と爲るに至れるは田舍よりの移住正に其主因を爲せるなり。

加之、最近都市の人口死亡率が其出生率以下に降れるの事實に對しても田舍よりの移住は確に其一因を爲せるものあり。歐洲各市に就て試みられたる幾多の精密なる統計調査の結果に據れば、輓近に於ける都市人口の自然的增加の實現は疑もなく出生率の增加に非ずして死亡率の減少に在り。換言すれば總人口に對する各年度の出生者の數の割合增加せるが爲に非ずして死亡者の數の割合減少せるの結果なり。然るに此都市人口の死亡率減少には二個の事實の之が原因を爲せるものあり。就中一般に認めらるゝ第一の原因は都市に於ける衛生狀態の改善にして即ち其原因は都市自身の內部に發生せるものなれども、第二の原因は都市に於ける人口年齡別の變動即ち中年者階級の增加せることにして、外部より都市に移住し來れる人口の增加に基因せるの事實たるなり。

都市に於ける衛生狀態の改善は傳染病豫防施設の完備、醫療手段の普及發達、病院救護の改良完成を初として淸潔法の大成、排水及び用水の設備の完成、住宅供給の改善、食料品警察の改良勵行、公園の增設完備、等の施設に依り其實績を擧ぐるに至れるものに屬し、其施設は既に久しく醫學上より必要視せられたるに拘らず都市政廳の敢行し得ざりし所なりしが、近年都市に於ける人口の激增に伴ひ其不備に伴ふ危險の愈著しく感ぜらるゝに及びて漸く其實施の緖に就くに至れるなり。斯くて人口集中に伴へる衛生上の危險の大部分除去せらるゝに至れるは一大成功と稱す可き次第なれども、併し此等の施設は然らずんば非常に增進す可かりし死亡率を僅に普通の率に止め得たるに過ぎず。當今都市の死亡率著しく減じたりとは云へ、二三の都市を除けば其死亡率は今尙ほ容易に田舍に於ける普通死亡率の少なきに及ばざるなり。元來田舍に在りては都市に於けるが如き完備せる傳染病豫防の施設なく、醫療衛生の設備亦著しく闕如し、病院救護の如き殆と全く缺乏せ

るの有樣なるに拘らず、然かも尙ほ其死亡率の斯の如く少なき所以のものは畢竟都市に特有なる幾多の危險害毒の殆と全く田舍に闕如せると共に、其一方には空氣、光線、淸水等の供給豐富且つ純潔にして、住宅健康に適し其周圍又廣濶、加ふるに食料品多く淸新且つ純良なるの致す所ならずんばあらず。要するに田舍の生活は之を都會生活に比すれば幾多の短所と共に、又幾多の長所を有せり。然かも生命健康に及ぼす其影響より觀れば長所は遙に短所に勝るものあるが如し。方今都人士の寒暑を田舍に避け時々田園生活を試むる者益々多きを加ふるは畢竟之が爲にして、此等田園滯在者の本志も亦多く其健康の爲に在るは即ち其一證左と云ふ可し。

然れど田舍生活の此衛生狀態よりも一層直接に都市の健康に貢献するものは云ふ迄もなく、田舍の壯年者の都市への移住なり。一時的又は永久的の營利の目的よりして、田舍より都會に移住し來る者の數は近年益々多きを加ふるの狀あるも、然かも此等の移住者は多くは二十歲乃至四十歲の壯年期に在りて幼年者並に老年者は非常に少なく、正に體力最も旺盛、死亡率最も少なき年齡期の者其最大部分を占む、故に此種の移住者の數が都市總人口に對する割合多きを加ふるに從ひ、都市の死亡率は爲に著しく減ぜらる可きこと云ふまでもなかる可し。即ち都市の人口死亡率の減少生存率の增加と田舍よりの移住との間には斯の如き直接の關係ある次第なるが其他、多數の都市に在りては多數兵員の滯在も、亦人口統計の上に同樣の結果を生ずるものなきに非ず。蓋し兵士は健全なる壯丁のみより成り且つ其生活條件亦比較的最も健康なる狀態の下に都市に滯在するものなるが故に、其多數の滯在は著しく都市人口の生存率を增加せしむること勿論なればなり。併し田舍の移住が都市人口の年齡別の上に及ぼす此好影響を永久に持續せんが爲には年々歲々移住し來る民衆の數が常に都市總人口の增加に正比し若しくは其以上に斷えず增加するを必要とする次第なるが、此點に於ても最近の移住の趨勢は亦正に遺憾なく其增加を致しつゝあるものゝ如し、即ち年々歲々益多く都市に移住し來る田舍人士中兵士の歸休退役せる者は多く田舍に復歸するの風あれども爾餘の來住者に至りては概ね都市に永住して、歸還し去る者は頗る僅數に過ぎざるの狀あり。而して此等來住者の滯在は年月の經過と共に又都市に於ける高齡者

階級の數を加へ他日其死亡率增加の原因と爲すに至るの實なきに非ずと雖も、此高齡者の數は日に益膨脹し來る總人口の增加に比すれば、割合に少數となり、都市人口の膨脹に此高齡者に基ける死亡率增加の趨勢を相殺し、抹殺しつゝあるの觀あり。

併し、都市人口の生存率改善に資せる此移住は田舍人口の死亡率の上に多少の惡影響を及ぼすものなきを得ず。文明の進歩と共に一般の死亡率の漸次減少す可きは當然の成行にして田舍も亦其例に漏れざる筈なるに然るに近時社會の實際を觀れば一般死亡率の減少に對して田舍は多く關與せざるの狀あり。田舍に於ける死亡率は一般文明の進歩に準せるのゝ程度に減少するに至らざるものゝ如し。即ち田舍に於ける死亡率は今尙ほ往時と異なることなく從つて其出生率の比較的高きものあるに拘らず、其人口は割合に增加せざるの風あり。畢竟體力旺盛なる壯年人士の多數が都市に移住したるの結果に外ならざれども、併し田舍に於ける生存條件有利なるの一事は此缺闕を補ふて尙ほ餘あるものゝ如く、人口增加率の斷えず斯の如く削減しつゝあるに拘らず、然かも尙ほ能く其餘剩の人口を常に都市に供給し得るの狀態に在るなり。

要するに都市に於ける近時の死亡率の減少は都市人口の生存率の增加に在ること勿論なれども、其生存率の增加は主として特に健强なる多數の人民の外部より移住し來れる結果に外ならず。然るに此外部よりの移住民は主として、地方農村より來るものなりとせば、都市の死亡率減少の原因は結局其餘剩の人口を以て斷えず都市人口の減損を補充しつゝある田舍人民の强健なる生存力に在りと云はざるを得ず。精確なる往時の統計の以て之を徵す可きものなしと雖も、吾人の平素見聞せる實例に徵れば一百年乃至數百年の昔に遡りて其祖先を明にし得可き舊家名門は都市に於けるよりも遙に田舍に多きの實あり。是れ畢竟都人士の家門が田舍人士の家門よりも遙に多く且つ迅速に廢絕するが故にして換言すれば田舍人民の生存力が遙に都人士の生存力に超越するの致す所に外ならざるなり。塡人「フィッシュナラー」氏嘗て「インスブルック」市の公民戸籍簿を調査して報じて曰く一四八七年の同市戸籍簿に記載せる二百三十三家の公民家族中今日に存續せる者は一もあるなく、十六七世紀の頃より存續せる者も僅々三家に過きずと。(v. Inama-

Sternegg : Neue Probleme des Modernen Kulturlebens s. 134）惟ふに此種の統計調査の充分に蒐集せらるゝあらんには更に都鄙人口生存力の强弱を明にするものある可し。

三

然れど田舍人民の都市移住は都市と田舍の唯一の關係に非ず。其一方に於ては都市も田舍に對して、種々の重大なる影響を及ぼし大に田舍人の經濟的社會發達に資すると共に、又一面には依て以て大に田舍の實力を自家の發展に利用するの實あり。

即ち其第一は田舍に於ける工業的大經營の發達是なり。近世の工場的工業發達の緒に就くや田舍各地方に於ても工場大經營の設立せらるゝもの其數決して少からず。而して此等工場の勞働者は多く其地方農村の子弟中より之を募集するの常なりと雖も、然かも此徒の勞働の結果は主として都市の經濟に資するの傾あり。蓋し此種の經濟は概ね都市に於ける交易に發達を待ちて初て生存し得るものにて、其經營の發達は一に都市に依賴するの實あり。從つて其生產も亦當該地方の田舍それ自身よりも寧ろ都市の利益に資するの實なきに非ず。蓋し其生產物は都市の商業の資料と爲り、其販路は先づ之を都市に求むるの常なればなり。元來工場工業は都市に集中せる現今の信用組織並に大市場の組織に對して密接なる利害關係を有すること、農業及び農村人民よりも遙に緊密なるものあり。其結果工場の經營は全然都市的貨幣經濟的性質を帶ぶると共に、經營の此性質は又一方に於て其勞働者にも其特質を侵潤せしめ、勞働者の生計をして益々貨幣經濟に據らしむるに至る。是に於てか。此貨幣經濟の發達よりして欲望の分化發達起り、其影響は工場勞働者より延ひて更に其地方人民一般の上に波及するに至り、此に都市の進步せる經濟的生活を廣く地方各地に普及せしむることゝなる。消極的の保守主義者より觀れば斯る物質的文明の進步は或は農村の墮落と見做さる可しと雖も、一般の經濟的發達より觀れば斯る生活の上進は確に國民經濟の進步たり將た其進步の原因たるなり。

併し都市と地方村落との間に存する此關係は晩近大都市の附近に於ける郊外

都市の發達に依りて更に一段の濃密を加へ來れり。即ち十九世紀の後半期以降地方的交通機關の發達と共に、都市の住民の近郊廓外の村落に其居を移す者益々多く最近の大都市は此點に於て其近郊村落に對し恰も前述せる都市への移住と正反對なる風潮を示せるものあり。夫都市の近郊に於ける所謂る郊外都市の急激なる發達は實に其結果なり。此發達の第一要素と爲りしは營利の關係上都市を距るゝこと能はずして然かも市内の生活費の高きに苦める徒輩の郊外移住に在り。而して他の地方より營利の爲に此種郊外に移住し來る者又之を助けて其發達を促せし次第なるが此等郊外の移住民は何れも都市的營利の途に其生活を求むるものにて何れも、其生活は都市的貨幣經濟的性質を帶び而して此等多數の來住民の都市的生活は更に其地方在來の住民を驅りて等しく都市的生活に接近せしむるに至るものあり。其結果、近郊村落の經濟生活は急速に其村落的特色を亡失するの常なると共に、地方に依りては其位置風光其他の關係よりして都會人士中の裕福なる者の別莊地住宅地と爲り、此等上流人士の純乎たる都市的生活の感化に依りて、頗る進歩せる欲望の普及發達を見ることなきに非ず。殊に上流人士の來住は給水、排水、點燈交通等に關する高等なる、文明的設備を誘起するの原因と爲り、郊外住民をして都市の住民と同樣なる文明的利益を享受せしむるに至るものあり。即ち都市は斯くして自家の經費に依り郊外都市の住民を同化し其住民に無償的に多大の利益を與ふるの觀あれども、併し又一方より觀れば都市が此等郊外の住民より受くる利益は決して尠少に非ず。即ち都市は此等郊外の住民よりして、其商工業に要する無數の吏員及び勞働者を得可く、此等の吏員勞働者は實に都市に於て消費し、且つ其勞働の報酬をも又一部分は都市に於て消費し以て都市の繁榮に資するなり。次に郊外地方は又都人士の爲に廣濶なる低廉の宅地を供給し此に其住居政策上の設備、病院其他の衛生上の公設備等を完備するを得せしむるものあり。都市の經濟的膨脹及び發達に取りて此等の郊外部落は實に必要缺く可らざる實力供給の源泉たるなり。此點より觀れば輓近各國の大都市が漸次其附近の郊外都市を併合しつゝあるの事實は畢竟此都市發達の必要の成行と云ふ可し。さはれ都市と村落との間に存する此等の密接なる關係は決して所謂る郊外都市にのみ限れるものに非ず。大都市の附近村落に及ぼす如上の影響は遙に郊外都市の外に及び、縱

今ひ多少濃密の度を減じつゝも廣く數里乃至數十里の遠きに亘つて同樣の影響を及ぼしつゝあるなり。即ち此等の一大地方に取りて、都市は常に生產激勵の中心點となり附近一帶の生產の種類及び數量を增加せしむる原動力と爲ると共に、其生產の結果を自家の交易組織內に導入して、自家の發達に資するの風あり。地方町村は又都市の欲望に應じて其生產の方針及び數量を調節し且つ其生活習慣を都市の習慣に接近せしむるの風あり。斯くて兩者の關係は愈々密接し、相互依賴の實は益々密ならんとしつゝあるなり。然れば輓近に於ける大都會の生活狀態を明にせんと欲する者は併せて其附近村落の狀態をも研究するに非ざれば、其眞相を捕捉し難く、又地方町村の生活は其中心地點たる大都市の實狀を究むるに非れば之を明にし難きの常なり。

其他都市が田舍に影響を及ぼす第三の方法は都人士の田舍地方殊に浴場地避暑地避寒地に於ける交通及び滯在なり。都人士の此旅行は輓近交通機關の發達と共に其都市生活の必要なる半面と爲り、此種の旅客は年と共に益々增加するの狀あり。而して此種の旅客及び滯在客の田舍に及ぼす影響は郊外都市發達の影響の如く甚深なるものに非ずと雖も、併し年々歲々數月乃至數週に亘りて都人士の滯在する地方町村の生活が此等人士の感化に依りて著しき變革を致すは山中海岸又は浴場に於ける幾多の避暑地避寒地に明に認めらるゝの事實なり。即ち此等の滯在旅客は都市の生活を田舍に携へ來りて其實際を地方人士に示すに過ぎず。又經濟上より觀れば地方に於て消費せる丈け其地方を利するに過ぎず。何れの點に於ても都市は單に與ふるのみにて田舍は之を受くるに過ぎざるが如しと雖も、審に、其影響を觀察すれば都市の爲に受くる利益も亦決して少なしとせず。滯在旅客の宿舍及び別莊が家具裝飾其他の日用奢侈品にて都市工業の生產物を利用するに至るは勿論滯在者の此消費は又一方に於て地方人民をして其消費に慣熟せしめ、地方人民の間にも同種商品に對する需要を喚起して此に新に其地方と都市との商取引を密接ならしむ可く、遂には斯る滯在地をして半ば都市的生活に移らしむるに至るは各地に屢々目擊せらるゝ所の事實たるなり。

要するに都市と田舍との間には今尙ほ斯の如き密接の相互關係あり。都市は常に其人口に於て田舍より重要なる補充を受けつゝあるのみならず、必要なる勞働

力に於ても幾多の原料及び製造品に於ても亦斷えず其供給を受け其商品の販路をも田舍に求めつゝあるなり。之と同時に都市に發達せる高等なる物質的生活の感化は漸次田舍に波及して田舍の生活を向上せしめ、之を都市化せしめ以て、田舍と都會の間に存せる懸隔を漸次平均せしめんとしつゝあるを見る。而して是れ文明の進歩せる邦國一般に現はるゝ所の普通の現象に屬し都鄙全般の物質的文明は實に此兩者の相互影響に依りて日に益々促進されつゝあるなり。都鄙の此關係より觀れば、縱令ひ一時の間其發達の特に都市に偏するの傾を生ずることありとは云へ、爲に其人口補給の源泉たる全國各地方村落の廢滅を見るに至るが如き偏頗なる發達は惟ふに現はるゝことなかる可く、又近世の物質的文明の雄大なる勢力の中心點たる都市が田舍の生活を感化する其勢力は徒に之を沮止せんとするも到底其目的を達すること難かる可し。無欲恬淡の仙人的簡易生活を理想とせる保守的の道德論者より觀れば近世に於ける田園生活の如上の都會化は確に農村の墮落なる可く、都市の膨脹は人類一般の生活難を加へしむる道德上の一大罪惡たる可く、物質主義享樂主義の論者より觀れば其見解は正に其正反對たる可し。されば斯る見解の相違は固と是れ各人の人世觀の相違に出づ。吾人は此人世觀の相違に對して敢て其是非を云はざる可し。唯々何れの見解に出づるにせよ、近世都市の發達に對して、言を立て策を行はんとする人士の須らく都市對村落の間に存する如上の關係に注意して極端なる偏頗の立言立策に至らざらんことを切望するものなり。（大正四年七月十六日稿）